

働くべきながら短期大学を

ここにも異色の卒業生

県係長や力ナン村指導員

昌平義いわき高大學(中央光泰學長)の第一部・第二部の第七回卒業式は10日、同大學五階の大講義室で行われた。働きながら学んだ第一部(後間)卒業生の喜びはひとしお大きくなり、異色の学生が多い。それの人々にスポットをあててみると人生航路の味わいがあった。

県いわき対事審議課課長で、職場において書へ学んだのが四十五年ぶり織井安吉さん(五十歳)。十七年春以来不倒不屈の老学生一男一女の父親だ。昭和三十五年、小名浜高校時制に小名浜高校の定期制を卒業し、格をつけて勉強は続けたが、二人の子供を育てあげた。第二部にハシシドトをじめた、未米洋次さん(三十九歳)。身障者ヨロニカ子、村指導員だった。織井さんは、織井士の資、井さんと同じく小名浜高校定期制を働きながら突破、ついでいわき市を卒業したが、卒業後は税理士にならうと思いつた。四十一年にいわき短大第一部に入学したのがキッカケ。やうにが、四十六年四月に田島建設事務所に就職。田島正次さんは三十九歳。富本さんも晚学で、少年のころ大運動となつて中断。再び、いまのところはまだ探究、外國留学によって自分の

ものを握る自信タップリ、希望に胸を輝かせている。

市の職員やサ

ガバッた女子社員

第一部卒業生五十二人を職場別

短大卒業した卒冠渡りの人に

にみるといいわき建設所職員十

一、農業三、共立病院の高等看

護院出身の英才三、郵便局二、金

融関係一、農協関係二、經理事務

所二ほか東北電力、石炭事務所、

商工、日鉄八、茎、保険会社な

に終えた青年が集い、喜びの卒業の懇親会は、会社の理解ある。誠意をガッカリと手に握ったので、思い切って短大の門をいたいた。いま卒業証書を手にして、Jの2年間は健闘。学友に支えられ、本当に楽しかった。女性の学生は、心から生涯の眞り、うれしさいっぱいの頃の頃の姿

をのこしていった。

中央光泰學長の話「一部の生

徒君は、普通の人の二倍のこと

じだ、人間関係の交流があら

が広がられ、人間性の豊かな向上

が期待されるのです。私はこの

話を直接

がこめて、ともに学んでいます。

そこのところを、私はこの

ことを、このまま

が進むことを

めに、このまま

が進むことを

